

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 14 日現在

機関番号：32630

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2017

課題番号：16K16733

研究課題名(和文) 中国後漢の墓域における図像の作用 - 儒教図像史確立のための発展的研究 -

研究課題名(英文) The action of iconography in the grave area of Eastern Han dynasty

研究代表者

榎山 満照 (NARAYAMA, Mitsuteru)

成城大学・文芸学部・特別研究員(PD)

研究者番号：30453997

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、死者を葬るための複合施設であった後漢時代の墓域に着目し、そこに建つ石闕の存在を、中国美術史上に明確に提示することを目的としたものである。

2年間にわたった調査研究では、これまで実施した石闕の図像調査を引き継ぎつつ、倒壊した石闕の残石を調査対象に加えることで石闕の実物資料をより充実させることができたのは大きな収穫であった。また、未報告の孝子たちの教訓物語が彫刻されていることを確認し、それを研究会で口頭発表するとともに、学術論文として発表する準備を整えることができた。

よって、本研究では、後漢時代の儒教説話を儒教図像史の上に定位させることに、一定の成果を残すことができたものとする。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to present the existence of the stone gate in the grave area of the Eastern Han dynasty.

In the two years of research studies, it was able to enrich the works by adding the destroyed stone remnants to the survey subjects. Furthermore, I found out the unreported tales of Confucianism, it was orally announced at the research meeting, and it was possible to prepare to publish it as an academic paper.

Therefore, in this study, I think that I could have achieved certain results in orienting the tales of Confucianism in Eastern Han dynasty to the Confucian iconography history.

研究分野：中国美術史

キーワード：後漢 石闕 儒教 孝子

## 1. 研究開始当初の背景

孔子を祖とする儒教は、日常社会における政治道徳や処世訓を説く学問思想である。それは地上に理想的規範をもつ実践的教説であり、その理想があくまでも現世で実現されることを目指す。つまり、儒教は現世を志向する。よって、本来的に天上世界や来世への憧れと無縁であった。そのため、儒教では神格を明確にしてそれを造形化することは稀で、靈魂の行方と死後の世界を具体的に描写し造形化することはほぼなかった。従来、仏教やキリスト教に比して美術のあり方やその視覚的効果に対する考え方の比重が軽い、と評価されてきたのもそれ故であり、儒教の造形表現そのものが等閑視され、それに着目し掘り下げた美術史研究もおこなわれてこなかった。

あらためて留意すべきは、儒教が歴代王朝において一元的な支配理念として機能し続け、周辺のエアシア諸国の政治制度に対しても、強力な規範として作用した極めて重要な思想であったことである。支配者層の権威を保障してきたこの思想が、特に識字率の低かった古代中世において、はたして図像の視覚的作用を全くに無視していたであろうか。歴代の支配体制を思想面で支え、現世における個々人の道徳的修養を奨励していたのであれば、それに資する「教化の道具としての美術」が確固として存在し、機能していたのではないか。研究代表者は、これまでこの疑問に研究の関心をおき、儒教図像史の確立を構想して、儒教と美術との関係を歴史的に捉え直す作業を継続してきた。

研究代表者が専門とする中国古代の場合、いま目にする美術作品のほぼ全ては、地下からの出土品である。端的に言うならば、それらは「死者の靈魂の行方」を視覚的に追ったものである。そのため、ともすれば中国古代の美術は「死者のための美術」という単一的イメージで捉えられ、死後の世界を志向する神仙思想を軸として主題解釈がおこなわれてきた。しかし、当時の思想界を席卷していた主流思想は、あくまでも現世を志向した儒教であった事実には注意すべきであろう。今や一切が烏有に帰してしまった地上の豪壮な木造建築の内部には「現世に生きる者のための美術」が飾られていたはずであり、儒教理念の理解のために供されていたに違いない。すでに消亡したそうした美術（本研究ではそれを儒教美術とよぶ）の存在を前提として、現世で作用した支配理念により対象にアプローチする本研究は、副葬品や墓室壁画の図像から来世の様相を明らかにすることに偏ってきた従来の研究成果を大幅に書き換えるものになるはずである。それにより、古代社会における美術の役割と機能をより体系的に理解することが可能になるものと考えられる。

本研究の着想に至ったのは、平成19年度採択の科研費若手研究スタートアップ「四川

漢代石闕にみる儒教系図像の地域的受容と展開」（課題番号19820031）の現地調査時であった。調査対象とした石闕とは、2～3世紀にかけて墓域の入口に建てられた装飾性豊かな石造の門を指す。地上に現存する中国最古の建築遺構であり、本研究が着目する墓域を構成していた建造物である。調査当時、国内外の石闕に関する研究は形態による概括的な分類に留まっており、専著とよべるものは、四川地域の作品に限定して1940年代の不鮮明な写真を掲載した『四川漢代石闕』を挙げ得るのみであった。そのため、図像内容の正確な把握は困難であり、主題の比定や銘文の釈読に補訂を要する箇所が少なくなかった。そこで当該研究は、四川の石闕に浮彫りされた図像を網羅的に集成し、主題解釈と銘文釈読によって従来の報告を大幅に補訂するものとなった。

その過程で、研究代表者は「周公輔成王」、「董永侍父」、「荊軻刺秦王」など、儒教の重要な実践道徳《忠孝》を象徴する画題が多く存在することに気付いた。石闕は墓域の入口、すなわち境界に建つ門である。とすれば、石闕はそれ自体が死者の世界、および地上の現世へと続く二面性をもつ装置であったといえる。であるからには、そこに浮彫りされた儒教の図像は、死者のみならず、現世に生きる者へ向けても、何らかの意味を発するものとしてあらわされていた可能性が高い。つまり、現存する中国最古の地上建築である石闕の図像は、失われた「現世に生きる者のための美術」、すなわち儒教美術の一端を解明するうえで、看過し得ない有用な手がかりになるのである。

さらに、石闕がさかんに造営された後漢時代は、皇帝を頂点とした一元的ヒエラルキーによる支配体制が整った時代にあたり、まさに儒教の国教化が完成を迎える時期であった。すなわち、中国美術史上においても、後漢はその後の歴代王朝にも引き継がれたであろう「儒教における美術の機能とその有用性」を決定づける画期であったと言ってもよい。儒教図像史の確立を全体構想とする中で、本研究が後漢時代に焦点を絞った理由はここにある。

## 2. 研究の目的

本研究は、死者を手厚く葬るための複合施設であった後漢時代の墓域に着目し、そこに建つ石造建築に浮彫りされた図像の主題を解釈することで、従来はその存在が極めて希薄であったとされてきた「儒教美術」の存在を、中国美術史上に明確に提示することを目的とするものである。

儒教は歴代王朝において強固な政治規範として機能し続け、国家と個人、双方の祭祀の内容を厳格に規定してきた。にもかかわらず、その理念を造形化したはずの美術の定義は極めて曖昧で、今日に至るまで正当な評価は得られていない。そこで本研究では、儒教

図像史を確立することを目指し、まず儒教の国教化が完成をみた後漢時代の墓葬美術に着目する。この時代、儒教はことのほか葬礼を重視し、そこに煩瑣なほどの規定を設けていた。よって、靈魂の安寧の方法を図像学的に明らかにすることで、儒教と美術の密接な相関関係をあらためて定義できるものと考えられる。

上述した費若手研究スタートアップの題は、闕作品が最も多く現存している四川に限定したケーススタディであった。その成果として、四川では、「現世での忠孝の実践を奨励する儒教」と、「不老不死を希求し享樂的な来世を志向する神仙思想」、二律背反して並存していたはずのこの両者が渾然一体となった死生観が存在していたことを図像から実証した。

もっとも、石闕の現存作例は山東や河南地域にもあり、そうした他地域の作品との美術史的な見地からの比較研究は学界で未着手であった。広大な後漢の版図内では各地域間で活発な交流があったはずであり、儒教の理念に対する造形表現は、各地で個別に存在していた可能性が高い。よって、2年にわたる本研究では、四川のケーススタディの成果を発展させ、考察対象地域をより拡大して石闕の図像表現を網羅し、儒教美術の地域的展開の例証を蓄積する作業に取り組んでいく。

### 3. 研究の方法

本研究は、今なお地上に現存する石闕を調査対象とする図像研究である。現地でフィールドワークを実施し、図像の詳細な記録を積み重ねていくことが大前提となるが、およそ1800年もの間風雨にさらされている石闕は、図像の摩損を免れない。それとは逆に、倒壊し地中に埋もれていた石闕の出土も近年しばしば報告されている。本研究で現地調査をおこなう山東と河南に限定しても、1960年代に報告された件数と現在の実数では齟齬が生じているのが実状で、従来知られていた作品に関しても、図像の摩損が著しく進行している。本研究で蓄積する予定の最古の建築遺構の現状記録は、のちの漢代美術研究に資するものとなるはずである。よって「図像の記録作業」を本研究のひとつの柱と位置づけ、2年にわたる研究の1年目は、四川省を中心に現地で作品調査を重点的に行うこととした。

2年目は、前年の調査資料をもとに本研究の成果をまとめる期間と位置づけ、『漢旧儀』、『続漢書』礼儀志、および同書祭祀志に記された葬礼の典範を精査し、これまで等閑視されてきた死者の葬礼における儒教図像の作用を、文献と作品の双方から実証していくことを目指した。

### 4. 研究成果

儒教は現世における道徳と処世訓を説く。そして、死者を手厚く葬る墓域は、儒教の厳

格な葬礼に基づいて造営されていた。とすれば、表向き墓域は死者を手厚く葬るための施設であっても、その実、現世に生きる者の倫理観を満足させ、それを対外的にアピールするための、いわば利己的な施設でもあった可能性があるのではないかと。よって、本研究は従来の漢代美術研究のように、地下からの出土品を主体として「来世の様相」を検証していくのではない。研究代表者のこれまでの研究成果から導かれた以上の見解に拠り、墓域をあくまでも地上の複合施設として捉え、儒教の葬礼を詳述した『漢旧儀』、『続漢書』礼儀志などの文献史料と、墓葬美術中の実際の図像、その双方を照合して「現世の理想」を検証していく独創的な図像研究である。

2年にわたった調査研究では、これまで実施した石闕の図像調査を引き継ぎつつ、倒壊した石闕の残石を調査対象に加えることで石闕の実物資料をより充実させることができたのは大きな収穫であった。また、未報告の孝子たちの教訓物語が彫刻されていることを確認できたのは大きな収穫であり、教思想史等、関連する文献史学分野に新たな図像資料を提供することができた。

また、研究会での口頭発表のほか、平成30年度内に学術論文としてその成果を発表する予定である。これにより、後漢時代の儒教説話を儒教図像史の上に定位させることに、一定の成果を残すことができるものと考えられる。

### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

- ① 檀山 満照、後漢鏡の図像解釈—儒教図像に着目して、アジア遊学—銅鏡から読み解く2・3・4世紀の東アジア(仮)、査読無、2018年、ページ未定

〔学会発表〕(計3件)

- ① 檀山 満照、文王故事画像鏡の図像と主題に関する試論、平成29年12月早稲田大学東洋美術史研究会、2017年12月
- ② 檀山 満照、中国における尊像制作の黎明に関する諸問題—丁蘭図、金日磾図、匈奴休屠王の祭天金人の解釈をめぐって、平成29年5月早稲田大学東洋美術史研究会、2017年5月
- ③ 檀山 満照、尊像の制作に対する中国の伝統的思考—後漢の丁蘭図を手がかりに、2016年度早稲田大学美術史学会総会、2016年6月

〔図書〕(計1件)

- ① 檀山 満照、早稲田大学出版部、蜀の美術—鏡と石造遺物にみる後漢期の四川文化、2017年、総272ページ

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

檜山 満照 (NARAYAMA, Mitsuteru)

成城大学・文芸学部・特別研究員 (PD)

研究者番号：30453997